官　庁　報　告

官　庁　事　項

海洋生物資源の保存及び管理に関する基本計画の変更の公表について

海洋生物資源の保存及び管理に関する法律（平成８年法律第77号）第３条第７項の規定に基づき、海洋生物資源の保存及び管理に関する基本計画（平成26年11月26日公表）を平成27年11月26日付けで次のように変更したので、同条第９項の規定において準用する同条第６項の規定に基づき、公表する。

平成 27 年 12 月 21 日　　農林水産大臣　森山　**裕**

海洋生物資源の保存及び管理に関する基本計画

平成27年11月26日

第１　海洋生物資源の保存及び管理に関する基本方針

１　基本理念

排他的経済水域等における水産資源は、我が国が主権ないし主権的権利を有する資源であることから、科学的知見に基づき適切に管理することにより、その持続的利用を確保し、水産業の健全な発展と水産物の安定供給の確保を図ることが必要である。その場合、水産資源の保存・管理の担い手が漁業者であることに鑑み、漁業者の積極的な取組を助長するよう所要の施策を講ずるものとする。

このため、

⑴　水産資源の動向、他の水産資源との関係等の生物学的知見を踏まえ、水産物供給の担い手である漁業の経営状況等にも十分配慮しながら、水産政策審議会、漁業調整委員会等において関係者の合意を形成しつつ、漁獲量及び漁獲努力量について適切な資源管理方策を実施する。

⑵　また、資源及び漁業の特性に応じて、魚種や系群ごとの資源状況を踏まえた具体的な資源管理措置を漁業種類ごと及び必要に応じ地域や期間ごとに定め、適切な資源管理を推進する。

２　漁獲量及び漁獲努力量の管理

資源水準に見合った漁獲を実現するため、資源量並びに漁獲量及び漁獲努力量を的確に把握しつつ、ＴＡＣ（漁獲可能量）及びＴＡＥ（漁獲努力可能量）の設定及び管理、許可漁業及び漁業権漁業の規制等により我が国漁業の管理を行うとともに、許可制度等により外国人漁業及び遊漁の管理を行う。

また、これらの管理措置の実効を確保するための指導及び監督を行う。

３　資源管理指針・資源管理計画の推進

海洋生物資源の資源状況は、海域ごと、魚種や系群ごとにそれぞれ異なるが、資源状況や当該資源を利用する漁業実態等を踏まえた適切な資源管理措置を講じることにより、資源状況の回復・維持を図る必要がある。そのため、海洋生物資源ごとの資源管理の方向性や内容を定めた資源管理指針を策定するとともに、それに基づき、具体的な資源管理措置を内容とする資源管理計画について、漁業者等による作成及び実施を推進し、計画的かつ機動的な資源管理を図る。

この場合、計画的に資源管理に取り組む意欲のある者が、減収を恐れずにこれらの取組を実施することができるよう、資源管理・収入安定対策を講じる。

第２　特定海洋生物資源ごとの動向に関する事項

１　第１種特定海洋生物資源ごとの動向

⑴　さんまの動向

我が国周辺水域で漁獲対象とされるさんまは、北太平洋に広く分布し、これらが秋季に日本近海に来遊する。2014年の日本の漁獲量は22万トンであった。

日本のさんま棒受網漁船の標準化ＣＰＵＥ（１操業当たりの漁獲量）から資源水準は中位、過去５年間（2011年～2015年）の資源量が減少と増加を繰り返していることから動向は横ばいと判断されるが、2010年以降の資源量及び親魚量は、2009年以前と比べて少なくなっており、資源量は中期的には減少傾向にある。

⑵　すけとうだらの動向

我が国周辺水域のすけとうだらは、北海道周辺及び東北沿岸に分布しており、生息域の分布等によって太平洋北部に分布する太平洋系群、日本海北部に分布する日本海北部系群、オホーツク海に分布するオホーツク海南部及び根室海峡に産卵場を有する根室海峡の４つの評価単位に分かれている。

この中で最も資源の大きな太平洋系群は、2005年級群が卓越年級群となり、2007年級群も比較的豊度の高い加入となった。2014年の資源量は89万トンであり、２歳以上の資源量から資源水準は中位、過去５年間（2010年～2014年）の資源量の推移から動向は減少と判断される。日本海北部系群は、2006年級群の加入状況は良かったものの、その後の加入状況が悪く、資源量から資源水準は低位、過去５年間（2010年～2014年）の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。ただし、2012年級群の加入状況は良く、今後資源量の増加が見込まれる。オホーツク海南部は、資源量指数から資源水準は低位、沖合底びき網漁業のＣＰＵＥ（１網当たりの漁獲量）の推移から動向は減少と判断される。根室海峡は、刺し網漁業のＣＰＵＥ（１隻１日当たりの漁獲量）から資源水準は低位、動向は横ばいと判断される。

⑶　まあじの動向

我が国周辺水域のまあじは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別されるが、当該資源の分布域は資源状態により大きく異なり、両系群は一部水域において混在して分布している。

太平洋系群及び対馬暖流系群の2014年の資源量はそれぞれ６万トン、45万トンであり、太平洋系群及び対馬暖流系群は、共に、親魚量から資源水準は中位、過去５年間(2010年～2014年)の資源量の推移から動向は横ばいと判断される。

当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑷　まいわしの動向

我が国周辺水域のまいわしは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群とに大別される。当該資源は、これまで数十年単位で大きく変動してきており、その資源状況によって分布域が大きく変化することが知られている。両系群とも1988年から1989年を境として漁獲量が大幅に減少し、近年は低い水準で推移してきた。

太平洋系群は、2008年以降、比較的加入状況が良く、2014年の資源量は92万トンで、資源量と親魚量から資源水準は中位、過去５年間（2010年～2014年）の資源量の推移から動向は増加と判断される。対馬暖流系群は、2014年の資源量は前年（25万トン)より減少して19万トンで、親魚量から資源水準は中位、過去５年間（2010年～2014年）の資源量の推移から動向は増加と判断される。

当該資源は、新規加入群の状況及び海域によって変動が大きいことから、資源動向について注視する必要がある。

⑸　まさば及びごまさばの動向

我が国周辺水域のまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と日本海及び東シナ海に分布する対馬暖流系群に、また、ごまさばは、太平洋に分布する太平洋系群と主に東シナ海に分布する東シナ海系群に大別され、それぞれ両系群は一部水域において混在して分布している。全般としては、ごまさばは、まさばに比べ南方域に分布しているが、近年、太平洋では北海道沖合まで分布が見られている。